

13)細菌性髄膜炎(髄膜炎菌,肺炎球菌,インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く)

(定義) 種々の細菌感染による髄膜の感染症である。

令和5年の細菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から6人(累積定点当たり報告数0.50)の報告があり、令和4年(4人)より2人多かった(図2-13-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(0.49)は全国(0.81)の0.6倍で推移した(図2-13-1,図2-13-3)。保健所別では、名瀬(3人)、鹿児島市(2人)、始良(1人)の報告があった(図2-13-2)。年齢別では、0歳(2人)、10~14歳、50~54歳、65~69歳、70歳以上(それぞれ1人)の報告であった(図2-13-4)。

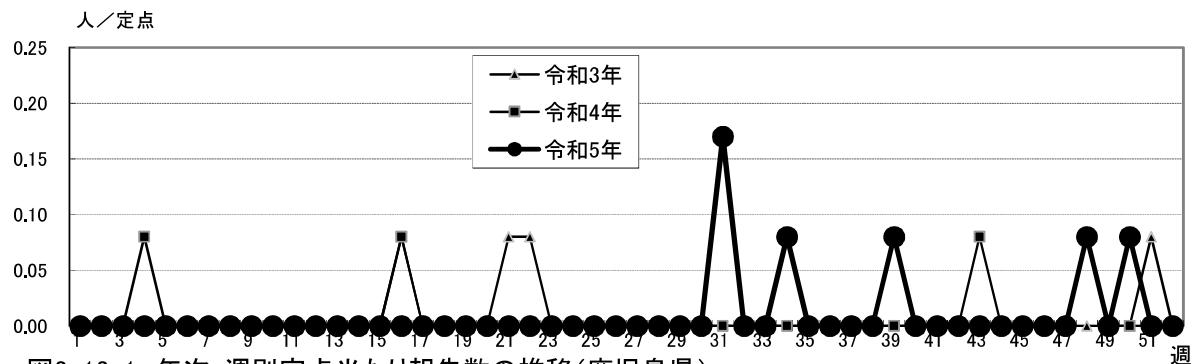


図2-13-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

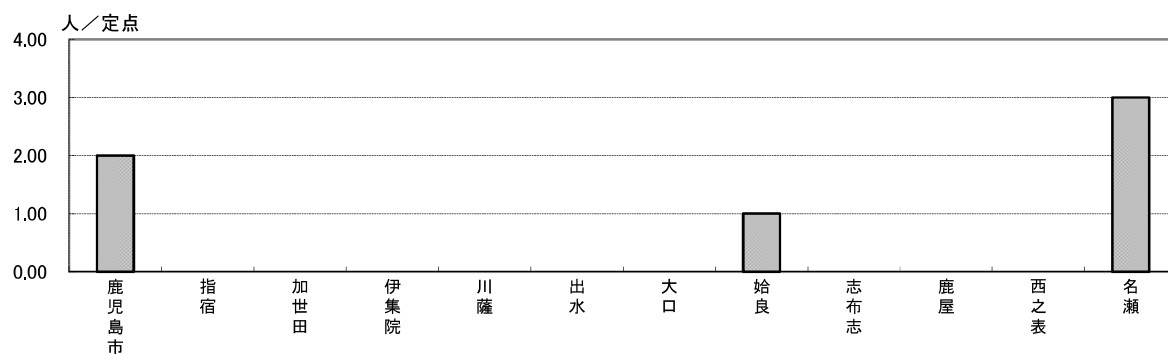


図2-13-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

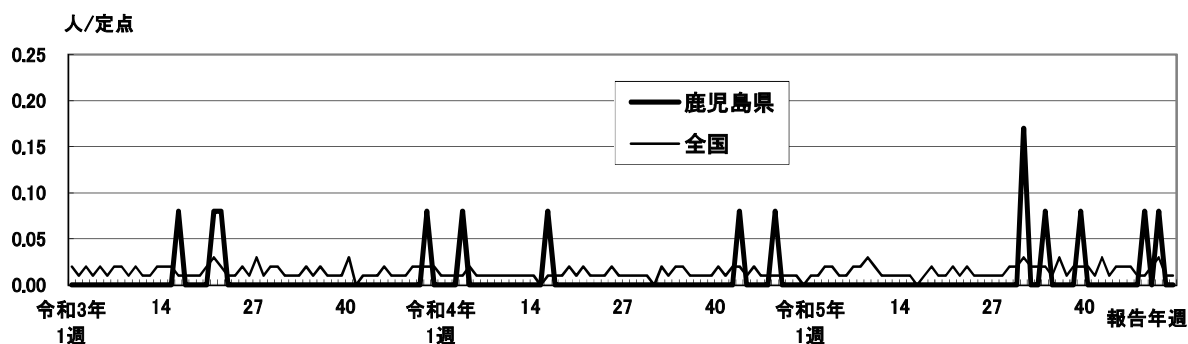


図2-13-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

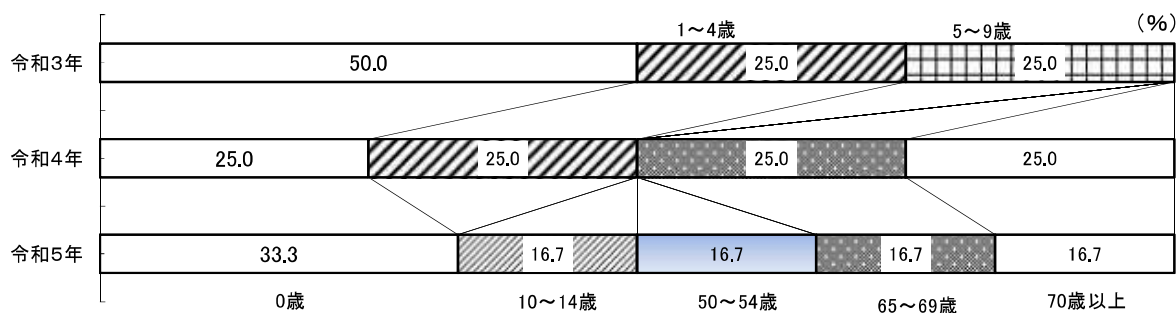


図2-13-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

14)無菌性髄膜炎

(定義) 種々のウイルスを中心とした病原体の感染による髄膜の感染症である。

令和5年の無菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から6人(累積定点当たり報告数0.50)の報告があり、令和4年(9人)より3人少なかった。累積定点当たり報告数をみると本県(0.48)は全国(1.48)の約0.3倍で推移した(図2-14-1,図2-14-3)。保健所別では、指宿、名瀬(それぞれ2人)、川薩、始良(それぞれ1人)からの報告であった(図2-14-2)。年齢別では5~9歳(2人)、10~14歳、30~34歳、65~69歳、70歳以上(それぞれ1人)の報告であった(図2-14-4)。

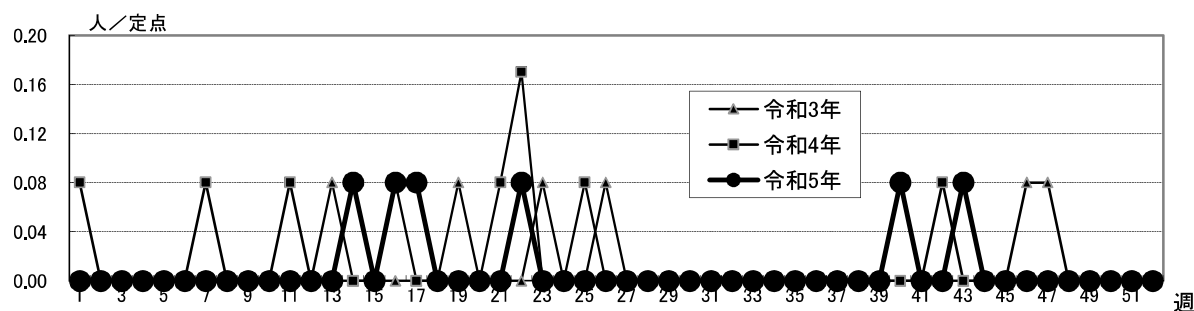


図2-14-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

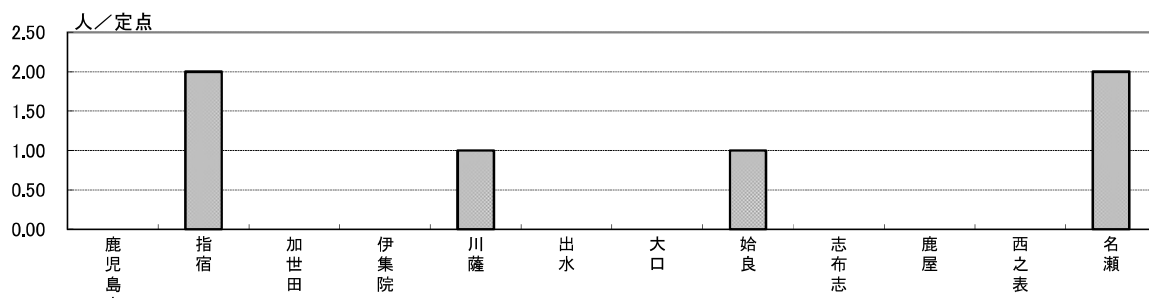


図2-14-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

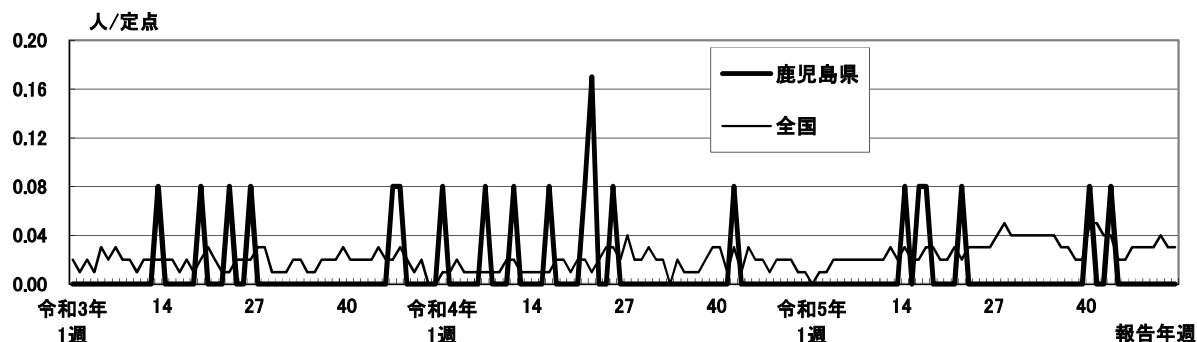


図2-14-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

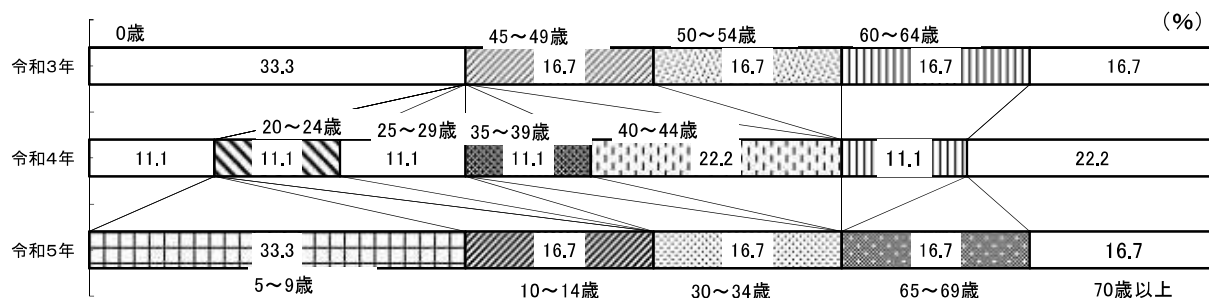


図2-14-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

15)マイコプラズマ肺炎

(定義) *Mycoplasma pneumoniae* の感染によって発症する肺炎である。

令和5年のマイコプラズマ肺炎は、基幹定点医療機関からの報告はなかった。(図2-15-1)。令和3年に1人の報告があり、令和2年には21人の報告があった。

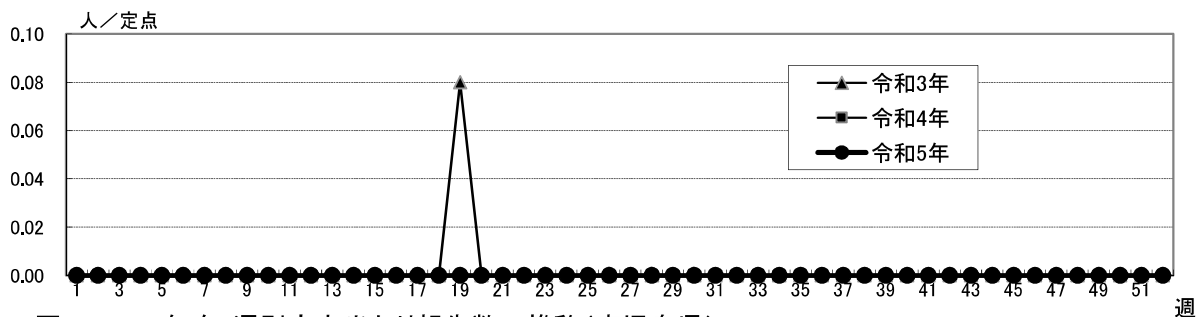


図2-15-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

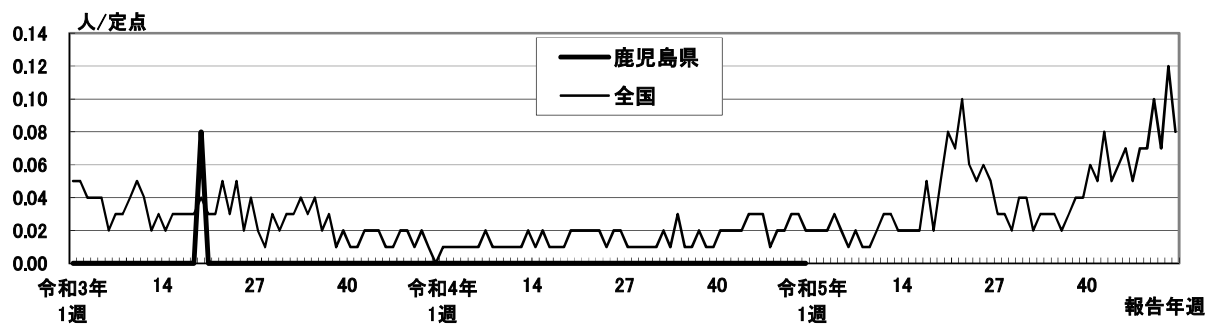


図2-15-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

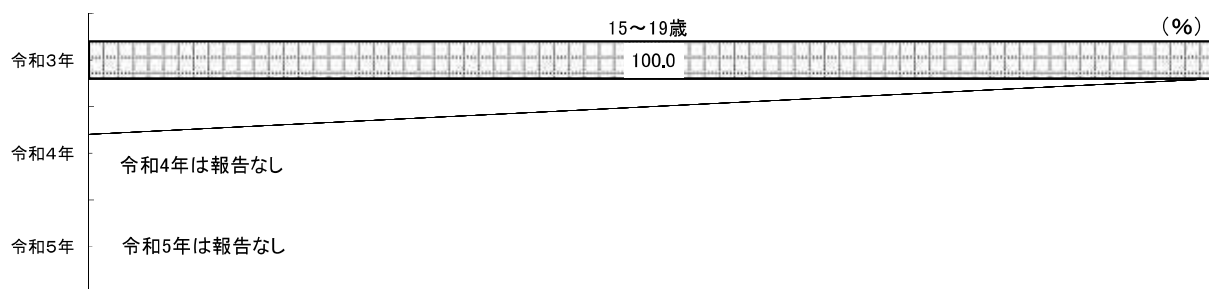


図2-15-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

16)クラミジア肺炎(オウム病を除く)

(定義) *Chlamydomphila(Chlamydia) pneumoniae, Chlamydia trachomatis*の感染による肺炎である。

令和5年のクラミジア肺炎(オウム病を除く)は、基幹定点医療機関から1人(累積定点当たり報告数0.08)の報告があった。令和3年、令和4年は報告がなかった。

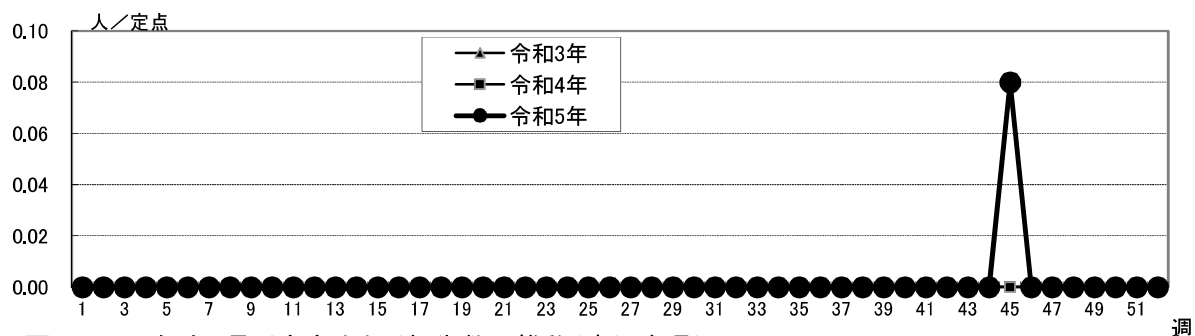


図2-16-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

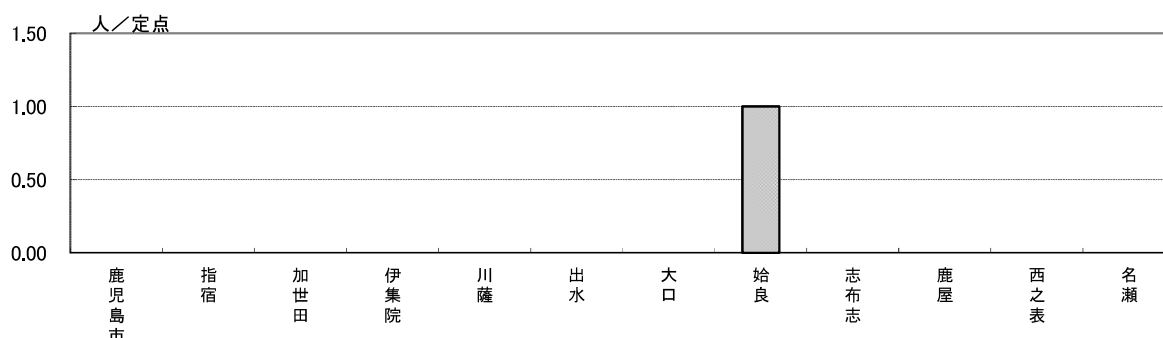


図2-16-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

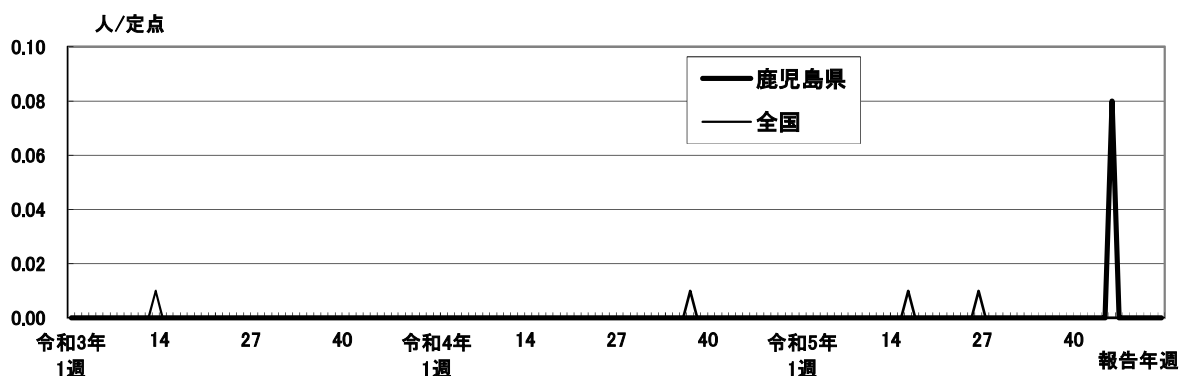


図2-16-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

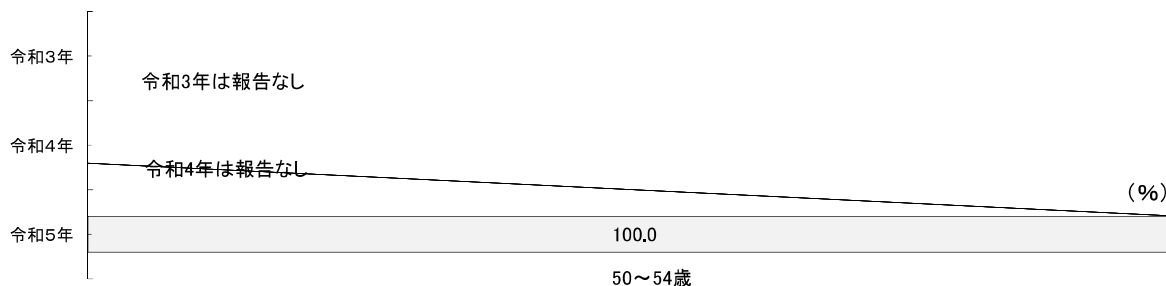


図2-16-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

17) 感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)

(定義) ロタウイルスの感染による下痢, 嘔吐, 発熱を主症状とする感染症である。

令和5年の感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)は, 基幹定点医療機関からの報告はなかった。令和3年(1人), 令和4年(4人)の報告があった(図2-17-1, 図2-17-2, 図2-17-3)。

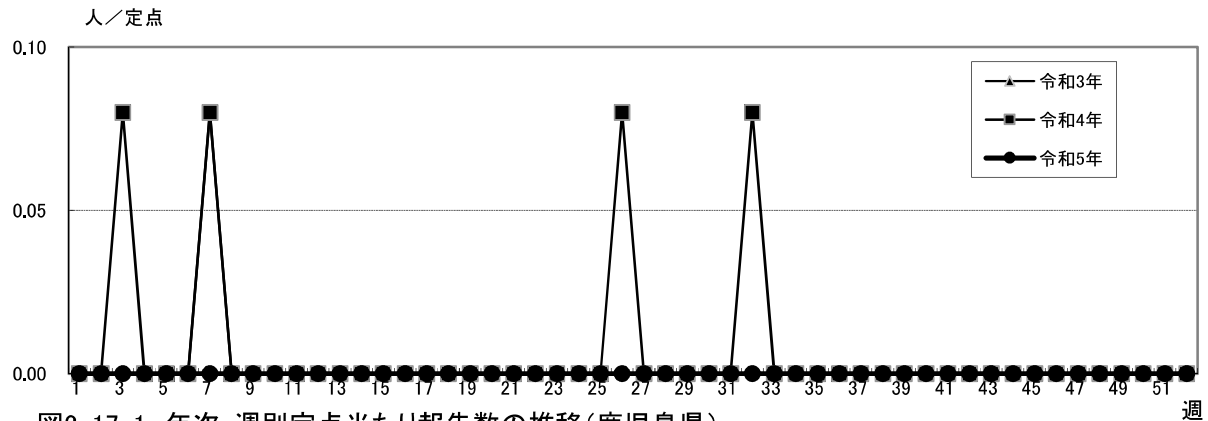


図2-17-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

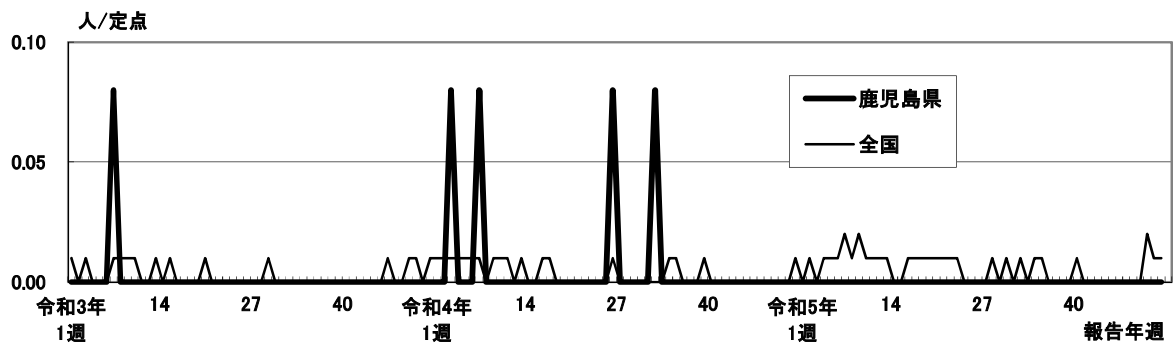


図2-17-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

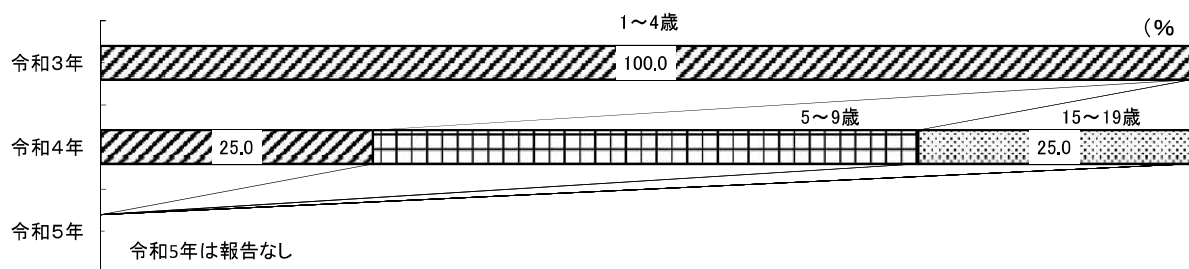


図2-17-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

18)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

(定義)メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、β-ラクタム剤、アミノ配糖体剤、マクロライド剤などの多くの薬剤に対し、多剤耐性を示す黄色ブドウ球菌による感染症である。

令和5年のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、基幹定点医療機関から134人(累積定点当たり報告数11.16)の報告があり、令和4年(111人)より23人多かった。月別報告数では、8月(16人)が最も多かった(図2-18-1)。累積定点当たり報告数を見ると本県(11.16)は全国(32.28)の約0.35倍であった(図2-18-3)。保健所別では、鹿児島市(46.00)が最も多く、次いで川薩(31.00)、出水(16.00)の順で(図2-18-2)、年齢別では、70歳以上の割合が約63%を占めていた(図2-18-4)。

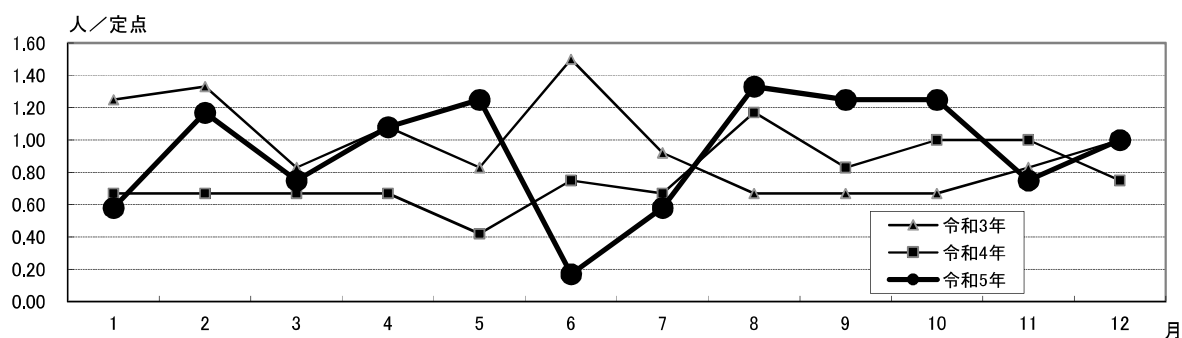


図2-18-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

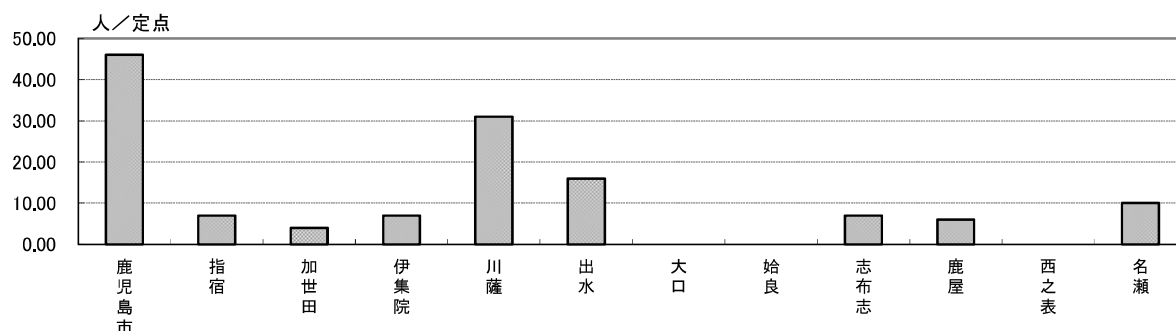


図2-18-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

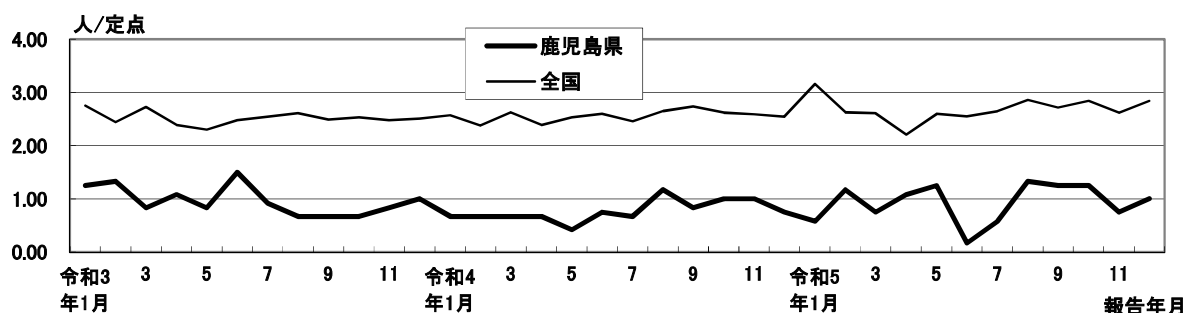


図2-18-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

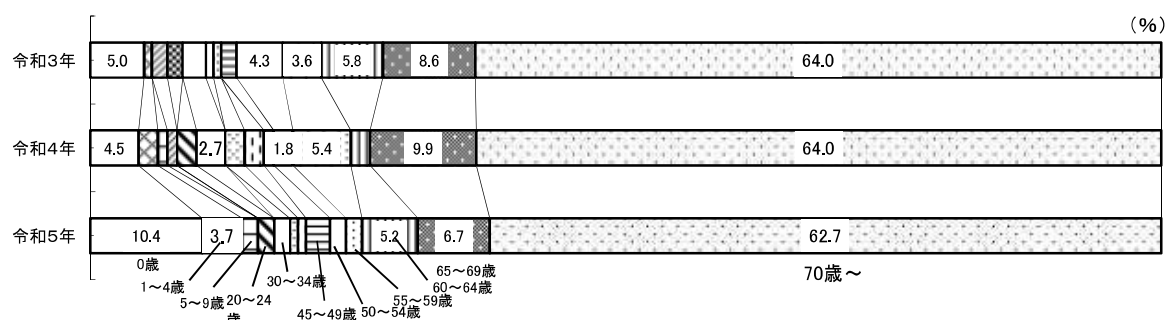


図2-18-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

19)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

(定義) ペニシリンGに対して耐性のある肺炎球菌による感染症である。

令和5年のペニシリン耐性肺炎球菌感染症は、基幹定点医療機関から17人(累積定点当たり報告数)の報告があり、令和4年(9人)より8人多かった。全国の動向も、年間を通して低値で推移した(図2-19-3)。保健所別では、すべてが名瀬であった(図2-19-2)、年齢別では1～4歳(15人)、0歳(2人)であった(図2-19-4)。

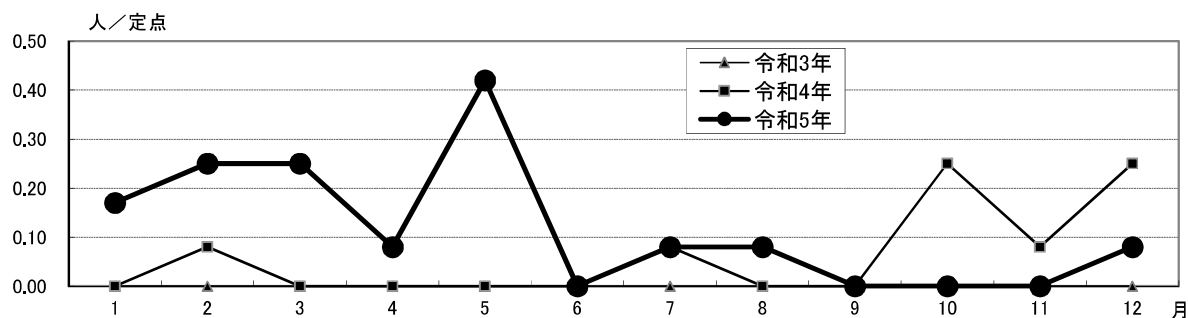


図2-19-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

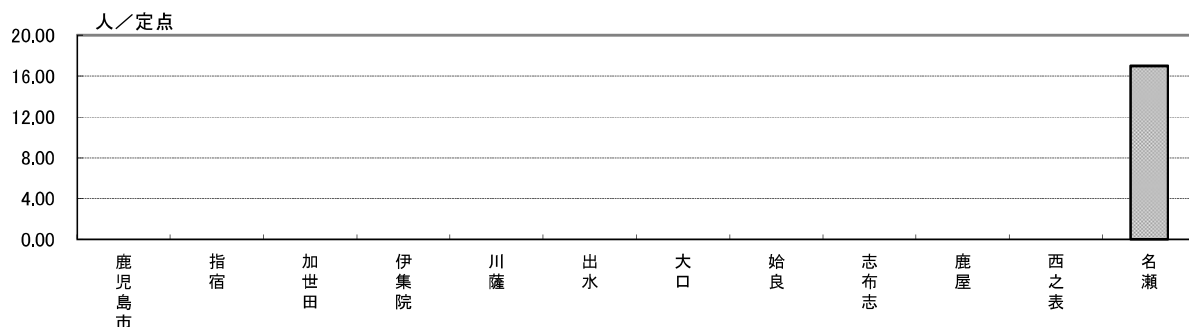


図2-19-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

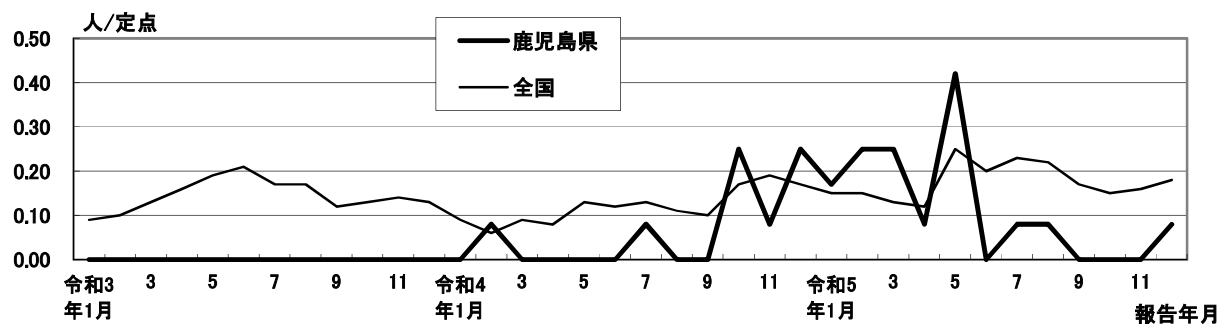


図2-19-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

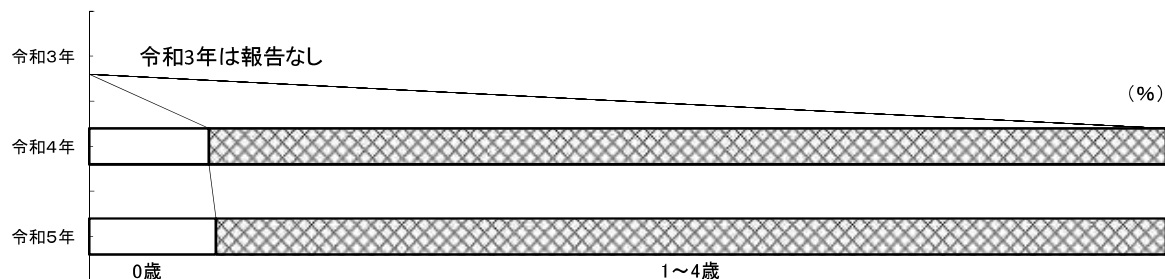


図2-19-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

20)薬剤耐性緑膿菌感染症

(定義) 広域β-ラクタム剤, アミノ配糖体, フルオロキノロン^①の3系統の薬剤に対して, 耐性を示す緑膿菌による感染症である。

令和5年の薬剤耐性緑膿菌感染症は, 基幹定点医療機関から1人(累積定点当たり報告数0.08)の報告があり, 令和4年(1人)と同数で, 指宿からの報告であった(図2-20-1, 図2-20-2)。累積定点当たり報告数をみると本県(0.08)は全国(0.20)の約0.4倍であった。(図2-20-3)。

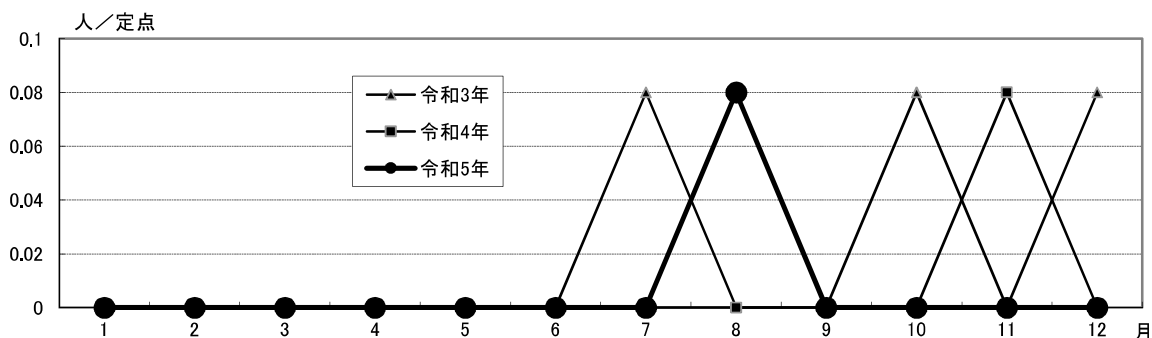


図2-20-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

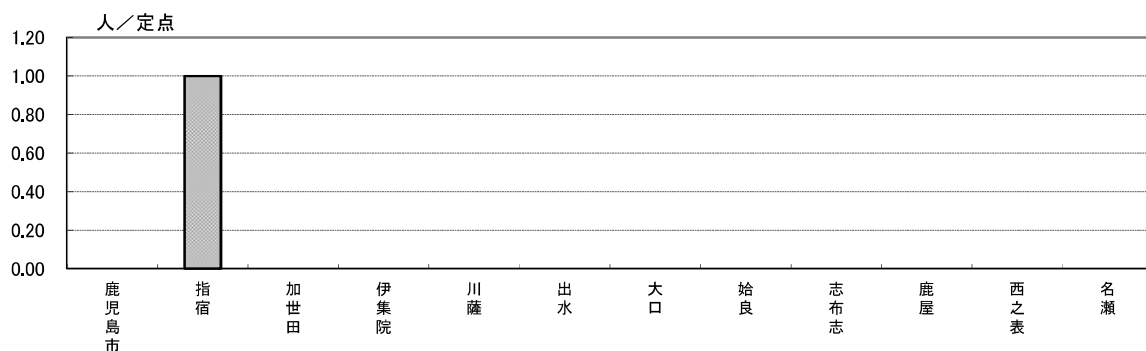


図2-20-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

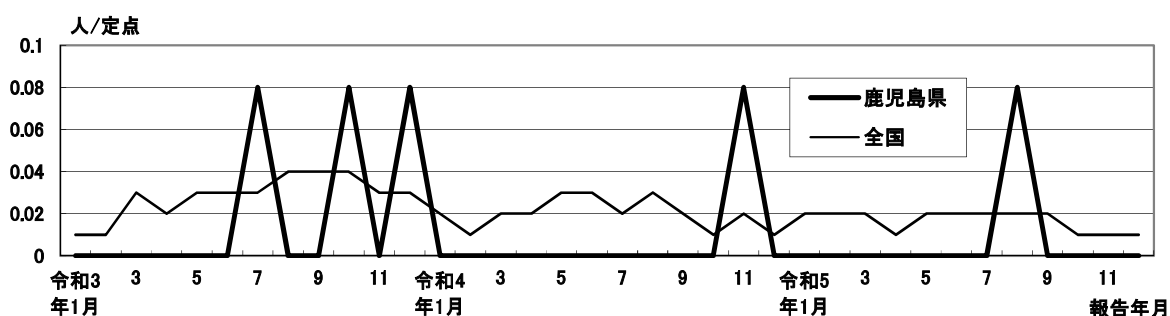


図2-20-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

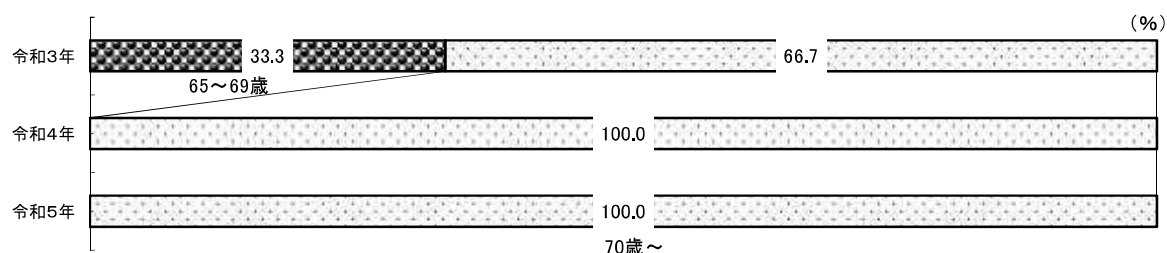


図2-20-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

(2) 眼科定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野
教授 坂本 泰二

1) 流行性角結膜炎

令和3年令和4年より増加した定点が、52週のうち24週に見られた。特に47週から52週までは明らかに増加しており、何らかの流行があった可能性は否定できない。ただし、そのほかの地域はほぼ前年並みと言える。一方、年齢別では3歳から8歳までの発症が例年より多いので、この年齢層で局所的に流行が発生した可能性が高い。学校あるいは保育所である可能性はある。また、その親世代にあたる30歳代から40歳代の発症も例年に比べて高いのは、そのことに矛盾しない。保健所定点当たりの発症数は川薩地区が多いので、その地域かもしれない。

県内全体の流行ではなさそうであるが、一定の流行が発生したと考えられるので引き続き注視する必要がある。

2) 急性出血性角結膜炎

極めて限られた発症例が見られるが、流行を疑わせるものはない。

21)急性出血性結膜炎

(定義) エンテロウイルス70型及びコクサッキーウイルスA24変異型の感染によって起こる急性結膜炎である。

令和5年の急性出血性結膜炎は、県内の眼科定点医療機関から2人の報告があった。令和3年、令和4年は報告はなかった。全国においても大きな流行は認められなかった(図2-21-1, 図2-21-2, 図2-21-3)。

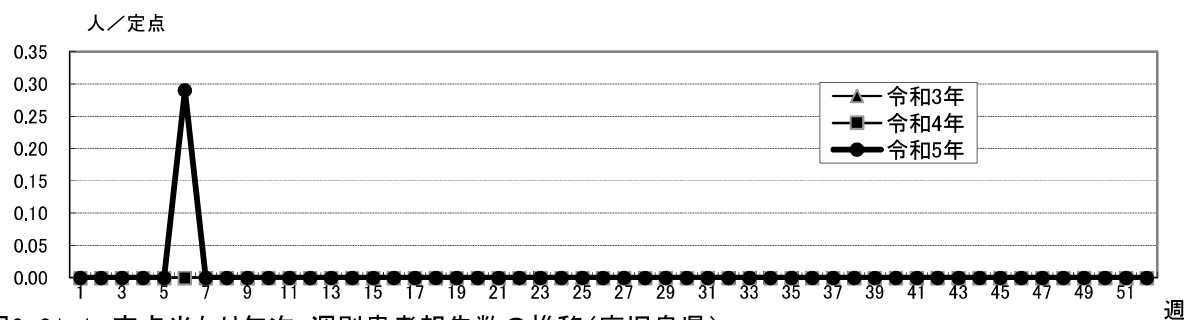


図2-21-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

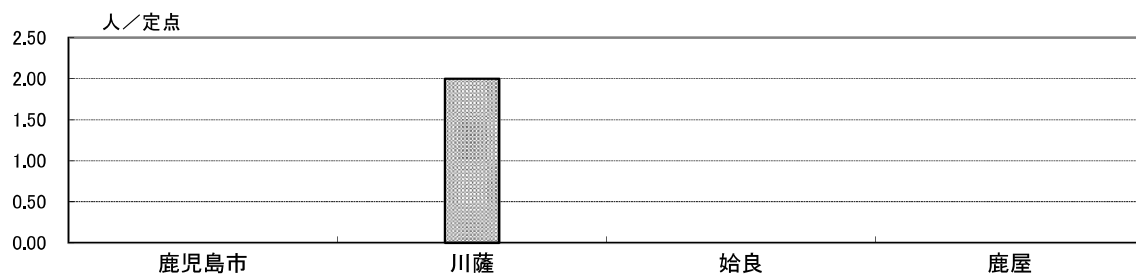


図2-21-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

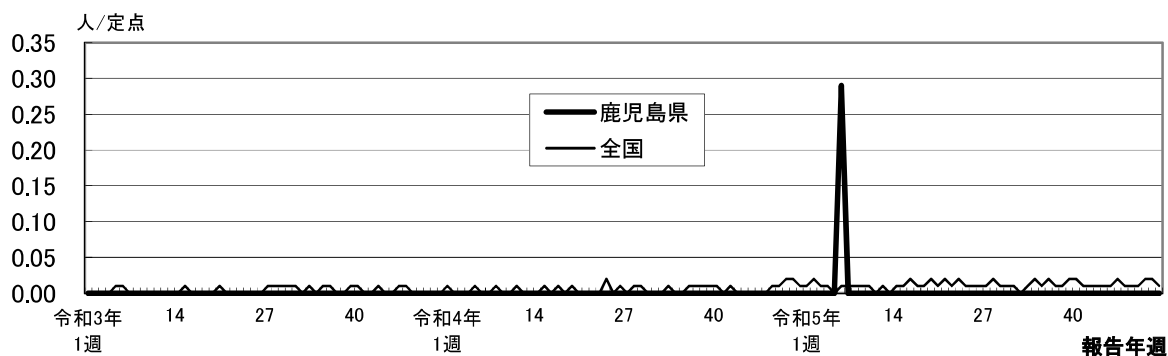


図2-21-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

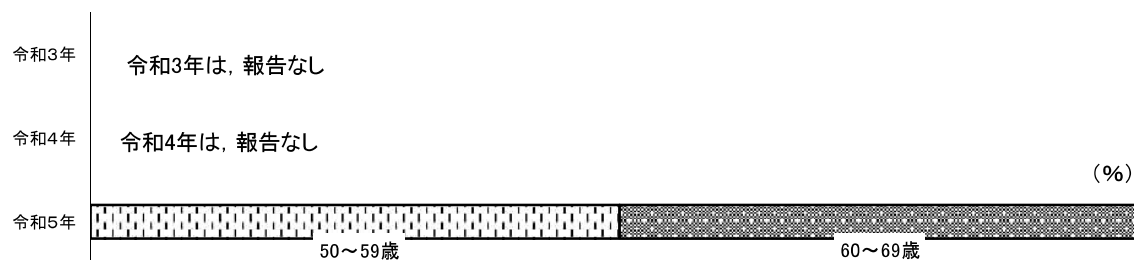


図2-21-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

22)流行性角結膜炎

(定義) アデノウイルス8, 19, 37, 4型などによる眼感染症である。

令和5年の流行性角結膜炎は、眼科定点医療機関から214人(累積定点当たり報告数30.57)の報告があり、令和4年(114人)より100人多かった(図2-22-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(30.55)は全国(26.15)の約1.2倍で推移した(図2-22-3)。保健所別の定点当たり報告数は、川薩(100.00)、始良(65.00)、鹿児島市(10.00)の順に多く(図2-22-2)、年齢別では、30～39歳(15.4%)、20～29歳(14.5%)、40～49歳(14.0%)の順に報告が多かった(図2-22-4)。

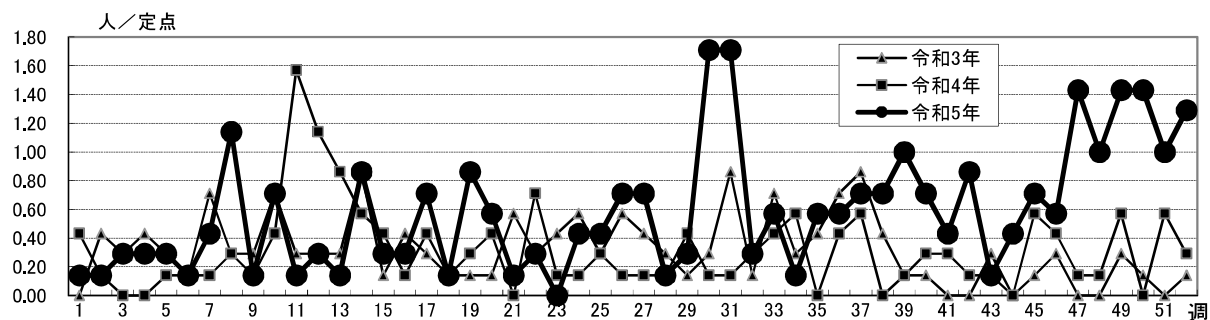


図2-22-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

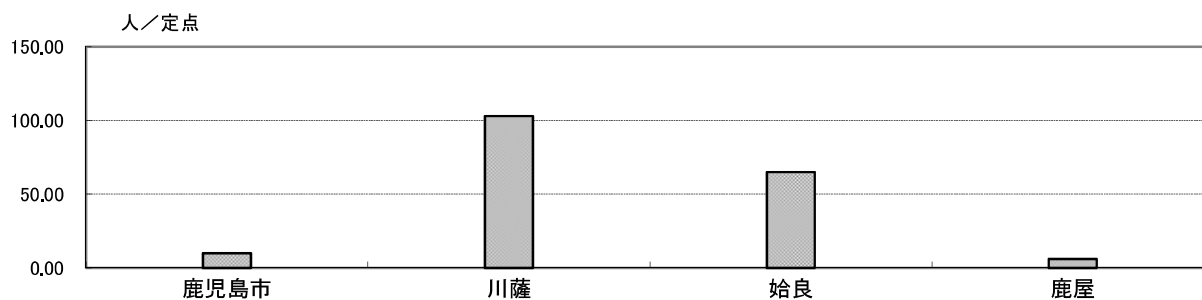


図2-22-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

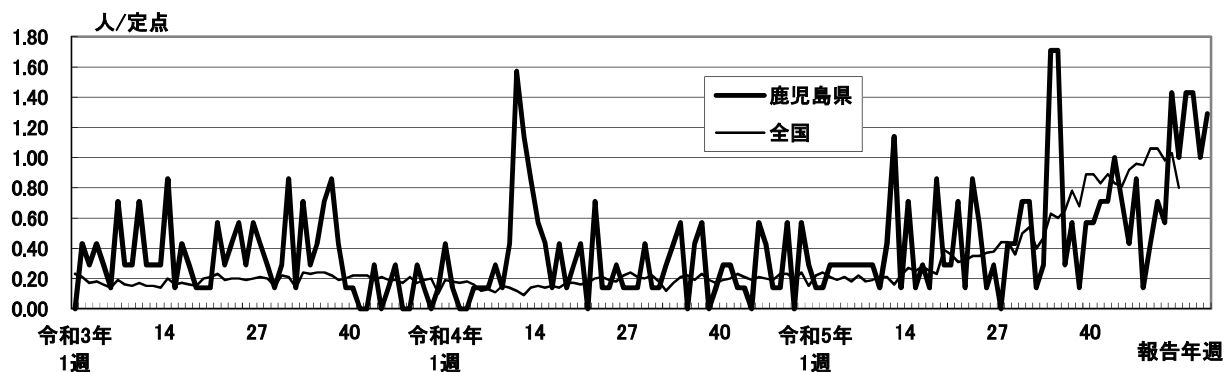


図2-22-3 定点当たり患者報告数の推移(鹿児島県, 全国)

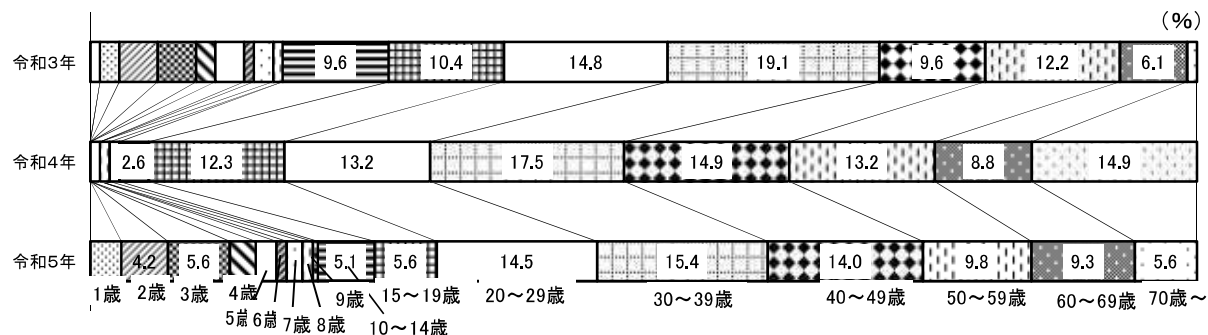


図2-22-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)